

東日本大震災活動報告・・・放射能災害を経験して

第1救護班 主事 医療社会事業課 菅野 正幸

～～～ 未来へ向かって新たな歩みを進めていきたい ～～～

救護班として相馬市の避難所に救護所を開設。その後福島第一原発事故があり、救護所を閉鎖、川俣町に移動した。川俣町の避難所で活動後、3月13日午後二本松市にてスクリーニングを受けた。以前は、放射性物質が飛び散るような事故は起きないという安心感があったが、3.11を境に考えは一変した。放射性物質が福島県内の広域に飛散し、住み慣れた土地、住まい、故郷に帰ることのできない避難者がまだいっぱいいる。この震災より受けた衝撃は大きかったが、しかしそれ以上に人と人の「絆」の強さや、「人」の素晴らしさも感じた。

今から、1年3ヶ月前、悪夢のような出来事が起きた。平成23年3月11日(金)14時46分「東日本大震災」・・・いままでに経験したことのない未曾有の辛く厳しい災害です。

発災当時、私は、課内で同僚らと共に業務にあたっていました。突然の強い揺れ、直感的に「大変な事が起きた、どうなるんだ」と感じました。福島市内震度5強。院内には、午後の診療を待つ患者様や面会の方々・入院患者様等が在院しておりました。初期対応として避難誘導や設備の点検、緊急備蓄物資の搬送等、職員一丸となって院内外を奔走しました。報道などにより刻々と被害の状況が入ってくるにつれ、被害の甚大さに目を疑いました。

私が、福島県支部第1救護班として出動し救護活動にあたったのは、3月12日(土)。福島県浜通りの南相馬市・相馬市、そして飯館村の隣に位置する川俣町です。南相馬市・相馬市では、津波の被害が大きく陸地の深部にまで、波が入り込み、一般道路のすぐ横に漁船が何隻も横たわり、車両、家屋なども全て流され何も残っていない光景を目にしました。先に活動に向かったのは南相馬市の南相馬市立総合病院です。先発していた当院DMATが入り活動していたので、我々は次の活動地として相馬市・相馬市災害対策本部へ向かいました。指示にて避難所となっている「スポーツアリーナそうま」に救護所を開設、救護活動を開始しました。そんな中、福島第一原子力発電所事故の一報。我々は、救護所を閉鎖し、共に現地で活動していた滋賀県支部救護班と、川俣町へ向かう準備を開始したが、アリーナ内にはまだ沢山の避難者がいました。川俣町に到着してから、町内の避難所の巡回診療を行った。我々の担当避難所は4箇所、どこの避難所にも200～600人位の避難者で満杯の状態であった。4箇所すべての巡回診療を終え待機場所である済生会川俣病院に到着したのは日付が次の日になっていました。

13日(日)の朝を向かえ、この日の活動は、待機場所である済生会川俣病院の勤務医師が登院不可とのことと院内において地元住民・避難者の診療支援を実施した。その間も福島第一原子力発電所爆発を受けて双葉町・浪江町・飯館村より続々住民がバスを連ねて避難してきました。15時に診療支援終了し、放射線の被曝スクリーニングのために、二本松市の男女共生センターへ向け済生会川俣病院を出発しました。被曝スクリーニングの結果、救護班員に異常なく不謹慎かもしれないが、安心したのが本音でした。実際、当時は放射性物質・放射線についてほとんど知識・情報がない状態であり、正直、不安な気持ちをいただいた事を覚えています。

ここからは、原子力事故・放射線について私自身が感じたことを記したいと思います。私が赤十字社員の一人となった若い頃、ある先輩職員へ「原子力災害救護訓練」に望むにあたりこんな質問したことがありました。「先輩、もしこの原発が爆発したら福島はどうなるのでしょうか？放射能災害の救護はどうしたらいいのでしょうか？」すると先輩職員は「もし、放射能が出たら救護はどうしようも無い。やり様が無い。でもそんな原発が壊れる様な大災害はまず無いから大丈夫。しっかり訓練するように！！」と激励されたことを覚えています。先輩職員の中にも私の中にも、原発は、放射能が飛び散るような事故が起きたら大変だけど起きるはずのない事故、安全安心。という思いが根底にありました。

しかし、3.11を境に考えは一変しました。津波が襲い、原子炉建屋が爆発した映像を目にし、そして放射性物質が福島県内の広域に飛散して土壌を汚染し、水を汚染し、大気を汚染し、住み慣れた自分の土地に、住まいに、故郷に、いつになったら帰ることができるのか、目途も付かなく避難されていらっしゃる方々がまだまだ数多くいる状態にあります。そういった方々を思うと居たたまれない気持ちになります。学校・各公共施設等には、放射線モニタリング機器が設置されており常時、空間の放射線量が測定されています。そこまでしないと安心・安全を得ることができない状況にあります。

今後も、長期間にわたり放射線と共存していかなければならないでしょう。現実と向き合い、現実を受け入れ、前に進むために何が大切か自問自答をしながら、未来へ向かっての再生が一刻も早く実現することを強く願っています。

終わりに、この震災が私に与えた衝撃というのは計り知れないものでした。とても強い衝撃でした。しかし、それ以上に、人と人との繋がる力、「絆」の強さも感じられました。「人」は、とても遅く、とてもやさしく、とても素晴らしいと感じました。

これから、挫けることなく未来へ向かって新たな歩みを進めていきたい。そんな気持ちで一杯です。